

1992. 3. 30発行

人びとの知恵を広葉樹に結びつける

Forest Art



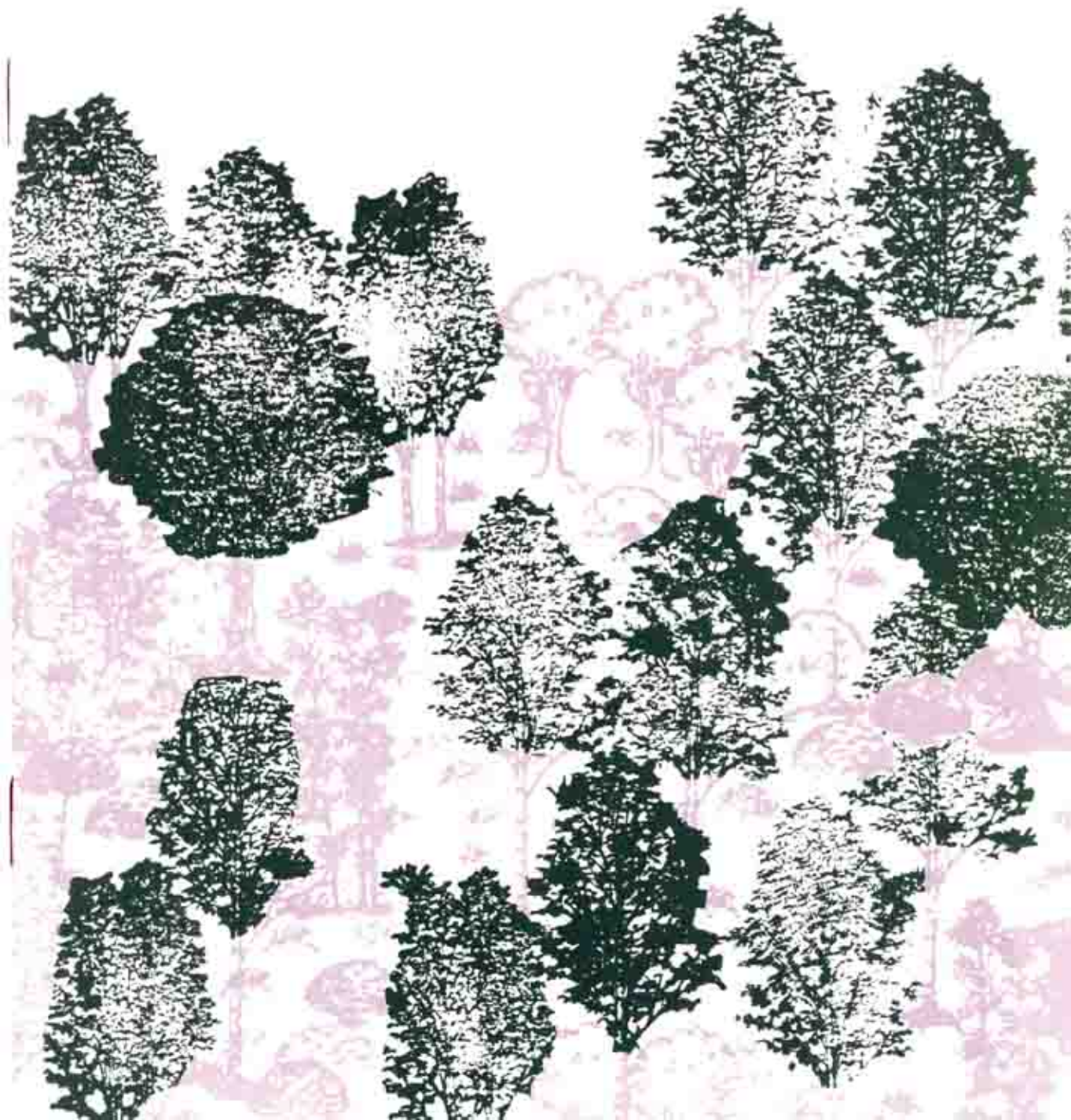
広葉樹文化協会

〒680 鳥取市片原1-106

浜本ビル3F

TEL(FAX)0857-29-4747

広葉樹文化協会機関誌 NO. 2



紅葉の大山に100名集まる (秋の行事)

記念植樹、学習、フォーラム、自然食の試食、茶会、句会など多彩に。



写真上、橋詰先生のお話を聞く会員
写真下、生田さんの記念植樹

平成3年11月2、3日の2日間、鳥取県の伯耆大山で秋の行事を開催しました。両日とも絶好の秋晴れ、参加者は鳥取市、大山周辺をはじめ、全国各地(栃木、千葉、東京、京都、兵庫、鳥根)から集まり、盛会となりました。

第1日、12:00 受付開始、収容能力100名の大山観光会館は貸切。13:00 まず大山町横ヶ原国有林99林班(大山を望む好位置)に、ネズミモチ、イロハモミジ、ナナカマド計70本を植樹(有志参加)、倉吉営林署の淀江担当区主任藤原勲さんにお世話になりました。14:00 つづいて大山寺の大山自然科学館に移り、はじめに鳥大教授(地質学)の赤木三郎さんに「大山のできるまで」というレクチュアを受けたあと、大山の自然と歴史のマルチスライドの素晴らしい映像(ナレーション、音楽つき)を堪能しました。

15:00 会館に戻り、広葉樹文化フォーラム。テーマは「森と人」基調報告は「文化としての広葉樹」・岸本潤。コーディネーター・吉田幹男。

東京から参加の日大学生・山田照恵さん、京都

の白砂さん、米子の長田吉太郎さん、鳥取の小橋義次さんなどそれぞれの視点で熱心な意見がでて大変有意義なフォーラムとなりました。

17:00 懇親会は出席者計42名。和気藹々とした鍋料理でした。まず自然食提供の長田吉太郎さんから、広葉樹を活用した自然農法の話が流暢に行われ、今夕のトリ肉がいかにか健康な鶏であるか、その鶏から産まれた卵がいかにか健康な卵であるかということを変えてユーモラスに説明されました。みんな「やっぱり味がちがう、うまい」と大好評。同じく葱やミニトマト、りんごなどの自然農法食品はたしかにうまいと思いました。

第2日、9:00 会館前で鳥大教授(造林学)の橋詰隼人さんから、大山のブナ林その他についてレクチュアを受けたあと、自然公園指導員の小西毅さんの案内で文珠堂へと向い、要所要所で小西さんの大山寺の歴史、橋詰さんの森の話聞きつつ歩きました。約2時間、大山寺の歴史と紅葉(黄葉)の雑木林を満喫しました。

11:00すぎ、茶会、句会参加者以外は流れ解散という形とし、茶会は会館横の野点茶席で楽しみました(出席40名)。雑木林句会は13:00~15:00 会館内会議室で、鳥取から13人、米子から5人、淀江から3人の計21人で開催。交歓の一刻をもちました。



大山をバックに記念撮影

そして、冬の行事に50名

冬晴れの樗谿で裸木を楽しむ。



松永さんと裸木を楽しむ会員

平成4年2月2日(日)、冬の行事は鳥取市上町、樗谿公園と鳥取自然休養林で実施しました。

10:00 公園内梅鯉庵で、早春の雑木林―山菜とりのマナー、というテーマで鳥大助教授の山本福寿さんの話。樹木生理学の専門から発して、軽妙洒落な話術で参加者一同を魅了、一時間余り、刻を忘れて聴きほれました。つづいて吉田幹男さんの映像樹木園(コンピューターアニメ)の映写会。これは当地方初公開ということで、みなさん、興味深く観賞しました。恰も樹木園に自分で入園し、コースを随意に進んで回っていくというもので、映像の精度は今一歩ながらこれからの自然観察の新しい武器となるだろうと思いました。

昼食後、13:00から松永能典さんの案内で、樗谿奥の自然休養林に入りました。参加者の色とりどりの服装、とくに赤が冬山の樹間に映えて印象的でした。前日降った雪が山径のところどころ残っていました。はるかに扇ノ山を望む尾根のけものみち、時々雪をふみ、裸木の梢のゆれを分けて歩く気分は格別でした。約3kmを歩いて梅鯉庵に着き、15:00に解散。

裸木の雑木林を歩く会は、真冬の2月ということでも心配しましたが、幸い好天に恵まれ何よりでした。しかも京都から白砂さん夫妻、岡山から西沢さん、松江から服部さんと遠くから参加され大変感激しました。



CGを使って吉田さんの解説

視点 「林芸の森」のモデル造成に着手

広葉樹文化協会では、かねてから林芸の森(フォレストアートグローブ)のモデル林造成のプランをもって、鳥取市近郊に適地をさがしていましたが、このほど国府町の肝入りで、同町山崎に土地提供者(借地)ができ、計画の実施にとりかかる段取りとなりました。

平成4年2月、「林芸の森」設計のイメージ案を国府町の企画開発課に提案し、基本的な諒承が得られました。現地は県道・雨滝街道沿い、殿ダム建設地の近くにあり、国府町、鳥取県、建設省などそれぞれの関係方面の後援も得られる見通しです。

広葉樹文化協会の夢である、森林というもの新しい活用のかたち、「林芸の森づくり」のこころみがいよいよ始動することになりました。会員みなさんの造成へのご参加を期待しています。



林芸の森モデル(常緑系)

ブラジル少年少女訪日使節団が来訪

平成4年1月19日、訪鳥中のブラジル松柏学園訪日使節団のうち、ルイ藤沢、武重白、ヌエリ美代子田中の3人と、通訳クリスチナ敏江本橋、案内の本橋靖子さんから8名が当協会を訪問、協会の活動状況、森林と環境問題など色々と取材しました。ブラジル帰国後、学園の報告会で、広葉樹文化協会のユニークな運動を紹介したいとのことでした。二、三世の少年少女。学生たちは小雪のちらつく鳥取で、印象深い一刻をもつことができた喜んでくれました。1時間半ほどの交歓でしたが、すがすがしい出会いでした。協会では各種パンフレットと岸本著「広葉樹と日本人」を全員に進呈しました。ブラジルからどういった反響があるか楽しみです。



岸本会長とブラジル使節団

広葉樹の科学 樹の実

その2 針葉樹の果実

橋 詰 隼 人

Forest Art No. 1で樹の実の名称と種類についてお話したが、先ず針葉樹の実から話を進めて行きたい。

針葉樹というのは、植物分類学上裸子植物に属し、一般に葉は針形・線形・鱗形を呈し、広葉樹にくらべて葉が小さいのが特徴です。しかし、なかにはナギのように長大円形の広い葉をつけるものもあります。針葉樹の最大の特徴は、胚珠が裸出しており、受粉時期に外側から見えることです。

針葉樹は、一般に球果(松かさ、まつぼっくり)と呼ばれる木質の果実を着生しますが、なかには肉質の仮種皮に包まれた果実を着生するものもあります。(写真1)。マツ科・スギ科・ヒノキ科など大部分の針葉樹は球果を着生します。球果は木質の乾果で、秋に成熟すると鱗片が開いて種子を散布します。球果の形は、円柱形(モミ)、長大円形(トウヒ)、卵状円錐形(マツ)、球形(スギ・ヒノキ)などいろいろで、樹種によって特徴があります。球果の構造は、ふつう種鱗、苞鱗、種子の3部から成っていますが、種鱗と苞鱗はゆ着して1枚のように見えます。種子は鱗片の内側にマツでは2個ずつ、スギでは3~5個着生します。1個の球果にアカマツはふつう50個前後充実種子が入っています。

他方、イチイ科、マキ科など一部の針葉樹は、外側が肉質の仮種皮で包まれ、松かさとは全く形態の違った果実を着生します。イチイ科のイチイ・キャラボクなどは初秋のころ仮種皮が赤く熟します。その中に卵状球形で黒褐色の種子が1個入っています。イヌマキの果実は、種子の基部にある花托が肥厚して暗紅色に熟し、あたかも種子のように見えます。イチイ類の仮種皮やイヌマキの花托は液質で甘みがあって食べられます。樹の実を観察していると不思議に思うことがいっぱいあります。

(鳥取大学農学部教授・造林学)



写真1. クロマツの球果(左)とキャラボクの多肉果(右)



鳥取県岩井付近で撮影 白岡 彪

広葉樹の科学 木の質

その2 木目ともく(柰)

作 野 友 康

材面に現われた年輪や組織構造の状態、細胞の配列などの外観的表現を木理または木目といい、次のようなものがあります。通直木理：材の長軸方向に平行に繊維が並び、真直ぐ通っているもの。斜走木理：長軸方向に対して繊維の方向がある角度をもち、いわゆる目切れになっているもの。旋回木理またはらせん木理：繊維がらせん状に旋回しているもので、多くの樹種にみられ、カラマツには著しいものがあります。交錯木理：繊維の走向が左右反対方向に交互に傾斜しているもので、なわ目ともいい加工が困難です。日本産材ではクスノキに見られ、熱帯産材では多くの樹種にみられます。波状木理：繊維の走向が波状にうねっているもの。カエデなど見る方向によって波が動くように輝くので、絃楽器の裏板、家具、工芸品などの装飾材として珍重されます。

細胞の特異な配列や異常などで、材面に特徴的な模様が現われ、とくに装飾的価値のあるものをもく(柰)といい、種々の名称のものがあります。リボンもく：交錯木理の柾目面にみられる帯状の模様で“しまもく”ともいいます。波状もく：波状木理によって現われる模様で“ヴァイオリンもく”あるいは“ごごもく”などと呼ばれます。まだらもく：交錯木理と波状木理が合わさって現われる濃淡の断続した模様。泡もく：板目面で水泡状の丸い輪郭の模様で、鳥の眼のように見えるものを“鳥眼もく”といいます。銀もく：柾目面に現われる広放射組織による模様で、ミズナラでは虎斑(とらふ)といいます。その他に牡丹もく、うずらもく、玉もく、縮もく、ちりめんもく、などと呼ばれるものがあります。

(鳥取大学農学部教授・林産学)



ケヤキの木目ともく、写真左：木目、写真右：もく(縮もく)

楽しみながら息長くフォレストアート

林芸(フォレストアート)のすすめ

- 雑木林の四季を歩きましょう。
雑木林の四季にふれ、木の効用、林のはたらき、森のめぐみを実感し、広葉樹の文化的なはたらきについて考えてみましょう。
- 雑木林の学校林をつくりましょう。
小中学校にグラウンドやプールと同じような施設として、雑木林の学校林をつくり、子供たちに日常的な自然体験の場を与えましょう。
- 雑木林の入会林をつくりましょう。
森林の知恵と、都市の知恵を出し合い、生かす形で、新しい時代にマッチするユニークな雑木林の入会林をつくりましょう。

木の文化・樹の文化

文化・カルチャーとは「耕やすこと」と辞書にあります。木の文化は、木と人のかかわり方によって変わります。人間は森の中に暮らしていたとき、森の四季によって色々な恵みを得ました。その享受の仕方・木の文化は人々の知恵によってさまざまに変わりました。

小原二郎氏は日本の木の文化はヒノキの文化であると言ひ、遠山富太郎氏はスギの文化であると述べています。両氏に倣って言えば、日本の木の文化は広葉樹・雑木林の文化であると私は言いたいのです。

それぞれの時代背景で、木と人のかかわり方は変わりましたが、ヒノキの文化も、スギの文化も、それを支えてきたものは広葉樹・雑木林の文化でした。エネルギーとして、生活用具として、環境として雑木林の文化は庶民の文化でした。

今やヒノキの文化、スギの文化から次第に遠ざかり、雑木林の文化もすたれる一方です。

しかし私たちの生活が、無機質な生存環境、コンクリートジャングルにとりかこまれている今こそ、木の文化、自然をとりもどす手だてを考えねばならぬと思います。

自然環境を毀しつづけてきた20世紀、やがてくる21世紀へ向けて、自然環境修復のための具体的行動として、広葉樹・雑木林に目をとめ、その温存と増殖につとめ、新しい時代の木の文化・雑木林の文化を創生したいものです。

を実践しましょう。

薬草づくりでフォレストアート実践



キハダ(黄柏皮)の荷づくり

鳥取市に全国規模で活動している生薬栽培の組織、全日本薬農組合連合会(全薬農)というのがあります。現在組合員数約1200名、この組織のリーダーが森下徳衛会長(64)(鳥取市)です。

若冠26才で始めた薬農の仕事は30余年のキャリア。なかなかの勉強家で、著書に「薬草の栽培教室」(富民協会・1974年)、「薬草利用教室」(富民協会・1983年)などがあります。

主力品目は草本でシャクヤク、トウキ、ミシマサイコとのことですが、木本のキハダ、サンショウ、クコなどもあります。

フォレストアートとしてとくに注目したいのは、在来の生薬だけでなく、雑草、雑木と呼ばれるものにも、新しい価値を探索していく森下会長の姿勢です。タンポポコーヒーの開発(昭和61年、NHKのNC-9ほかのマスコミで話題となった)など大へんユニークなものです。全薬農の生薬は多岐にわたりますが、木本として上記のほかたくさんの広葉樹があげられています。考えてみれば、これらは身近にありふれた雑木林の木々でもあります。人の知恵が加われば、雑木林はタカラの山というわけです。

雑木林の新しい価値をひきだす「林芸」は薬農的発想をとり入れる必要があると思います。

そして、森林が樹木だけで成立つものでないことを考えれば、草木もおのずから対象となるわけで、森下会長のユニークな発想と実践による数々のノウハウは大変参考となります。

創立当時より、私なりの薬農哲学でやってきました。全国が食料増産一本槍の時代には変人扱いにもされましたが、この頃は生薬・自然のものももてはやされる時代になりました。

—森下徳衛—

林芸随筆

私たちの祖先縄文人は、約1万年森の中で暮らしていました。その後、弥生のイネと鉄の時代に入って森はだんだんと消耗し、日本列島の森林の姿はずいぶん変わってしまったのです。森によって育った日本文化は、森の疲弊とともにおかしくなっていくように思われます。

私たちの祖先は、つい先ごろ(昭和中期)まで森と共生し、森を忘れることはありませんでした。住み家や集落の周りには色々な木々を集めて暮らしていました。色々な意味でこれらの木々は生活必需品の給源であり、文化でした。

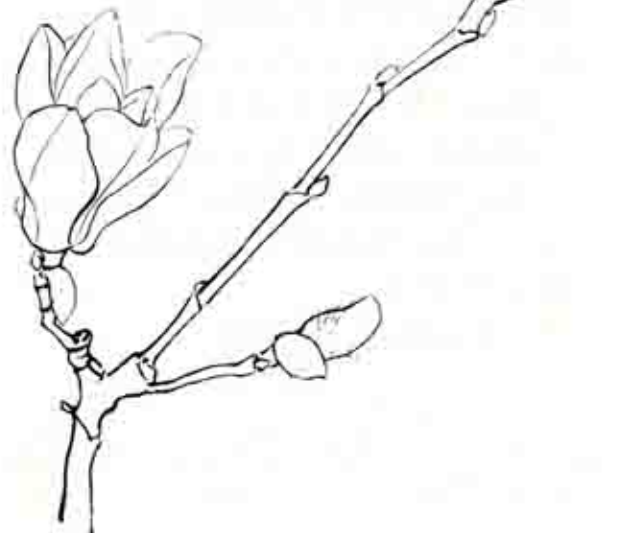
林芸の原型は、この屋敷林、集落林のイメージに近いものと思えばよいように思います。

半野生の木々が、人々とさりげなく共生していた風景、その向背地には、さらにさりげなく雑木林がつづいていました。

モノをもたらし、文化を与えたあの自然の表情こそは、まさしく私たちを育んでくれた健康な生存環境でした。

昭和中期以降、燃料革命、経済合理主義の激しい波によって、生物生産のしくみが大きく変貌したため、あのなつかしい生存環境も崩れ去ってしまいました。

私は、新しい「森づくり」のひとつの原型として、あの屋敷林の、家毎に表情のある木々を配したあの風景を、個性的な「林芸の森」として取り戻してみたいと思っています。



会員からのメッセージ

広葉樹と言っても「田舎（盛岡）にある雑木林だ」ぐらいの認識しかありませんでした。しかし今回大山での行事に参加し、先生の本を読み、これからの森づくりについて私なりに理解できたと思います。 東京・阿部信之

森林の取扱い方が産業型から非産業型へと変換する中で、広葉樹研究は残された大きな課題となっています。 広島・田辺紘毅

伊豆の小宅の庭つづきの林約400坪、30年来手を入れて、ケヤキ、サクラ、クヌギ、コナラ、ムクノキのいい感じの林にしました。シイ、カシをいじめるのが大変。 静岡・岡野 登

去年は家の前にある雑木林（島熊山の雑木林を守る会）の保全に一年ついやしました。その場所には特別養護老人ホームが建設されます。豊中に数少ない自然を残し、ホームは近くの裸地に建設をお願いしましたが、去年の暮れに木は伐採されました。ホームも必要、自然も必要ということで、代替地を探したのですが駄目でした。このへんのむずかしさにどうすればいいか迷ってしまいます。広葉樹文化協会は、私にとって学ばせていただけたところと思っています。催し物には遠くて参加できませんが、会報2号を楽しみにしております。 豊中・中尾利子

岸本先生

広葉樹文化協会の創立おめでとう

ございます。送っていただいた文献

を読ぶと大変興味深く感じました。

明察の広い概念で、この協会に特

に日本を将来強い影響にたると思

います。これから広葉樹文化協会の發

展を祈ります。

平成四年二月二十三日

シュニービンド・ファン

シュニービンド先生はカリフォルニア大学名誉教授。木材学界の世界的権威者です。Forest Artをお送りしましたら激励のFax(先生のご自筆)を下さいました。

行事案内

春の行事（総会・新緑の雑木林を歩く会ほか）

と き：平成4年4月26日(日) 9:00～17:00

ところ：鳥取市布勢総合運動公園

行 事：

◎植樹（公園内桜の園西側雑木林） 9:00～10:00

◎歩く会（徳尾の森）指導 松永能典 10:00～12:00

◎総会・フォーラム（陸上競技場第3研修室）

テーマ：森と人

林芸の実践を考える・基調報告 岸本 潤

コーディネーター 吉田幹男

◎なお同日並行して次の催しをします。（自由参加）

○雑木林で絵を画く会（指導・木下則之） 9:00～12:00

○新緑の中で茶会（長田茶店鳥取） 12:00～13:00

○新緑を詠む句会（雑木林句会） 15:00～17:00

◎参加費・茶会500円、句会500円、他は無料

申込先・当協会宛。申込〆切・4月15日

行事予告

夏の行事：扇ノ山のブナ林に再度トライします。

秋の行事：大阪・万博の森で設計者の吉村元男さんの話、民族学博物館見学などを中心にしてイベント検討中です。

協会の近況（12月末現在）

○平成3年12月現在の会員数（平成3年度会員・別紙一覧表）は、468名となりました。平成4年1月以降加入の方は平成4年度会員として登録します。

○支部結成の動き—松江市の会員で「松江支部」をつくる動きが具体化し、3月22日、宍道湖畔・水明荘で会合をひらくことになりました。

F A A蔵書・ブックリスト（その2）

○毛藤勤治：ユリノキという木（アボック社・1989年）

○デビット・バーニー、リリーフシステムズ訳：ビジュアル博物館・樹木（同期舎・1990年）

○マーティン・ハマー、渡部景隆訳：木はなぜたいせつか（岩崎書店・1990年）

編集後記

2月尽。季節の推移は早いものです。この間創刊号を出して物としたと思ったら、もう2号編集のタイムリミット。お蔭さまで秋の行事、冬の行事とも好天に恵まれ、みなさんのご支援によって予期以上の参加者を得ました。各位に厚くお礼申し上げます。2号の写真は白岡彪、安藤文隆、本橋靖子のみなさん、カットは白岡文江さんに提供していただきました。（J）